

## 個人・準拠集団・社会の3次元の制御の 視点で自己を記述する試み

山岡重行

### 問題

人間には自らを好ましい存在として知覚しようとする自己高揚傾向があり、そのために他者からの評価と尊重を得て自己評価を高めようとする。長期的に安定した自己高揚を可能にし自己評価を高めるために自らが置かれた状態を評価し、次取るべき行動を評価し行動を規定する自己評価基準が存在する。山岡(1992)は個人としての行動と集団の一員としての行動を統一して説明するために、極めて個人的な価値観を反映し個人としての行動を優先させる個人的評価次元と、社会規範や他者からの行動期待を反映し集団としての行動を優先させ社会的適応を求める社会的評価次元を仮定したモデルを提唱した。しかし、このモデルは社会的評価次元の範囲が広すぎるという問題点があった。現実の人間は様々な社会的集団に同時に所属しており、それぞれの評価基準に影響されて行動している。状況が異なればそのとき顕現化する集団規範も異なってくるのである。そこで、社会的評価次元を準拠集団次元と自分が一番所属意識を強く持っている社会の二つに分けて考えてみたい。状況ごとに所属する集団が異なっても、判断や行動の規範を提供する準拠集団の規範の影響が個人の行動に最も強い影響を与えるのである。また、準拠集団よりも大きな社会規範も影響する。例えば法律である。法律は日本で生活していれば日本の法律に従わなければならない。また日本社会よりも大きな範囲の社会規範も存在する。例えば、特定の宗教に基づいた行動規範、民主主義的行動規範、人権意識や環境保護の視点からの行動規範を社会規範として内在化している人もいるのである。何を準拠集団や社会と見なすかは人により状況により変動するが、準拠集団規範と社会規範の意識は短期間で急激な変化はせず、状況を越えて比較的安定していると考えられる。

本研究は個人の行動を制御する規範には個人的自己評価基準である個人規範、

準拠集団の価値観や評価基準を取り込んだ準拠集団規範、それに自分が生活する社会の規則や価値観を取り込んだ社会規範の3次元があると仮定する。それぞれの次元には、その規範に従って自己高揚をはかる機能と、その規範に従って自己確証を行い自己の行動を制御する機能の2つの認知機能がある。長期的に自己評価を高揚し安定させるために3つの自己制御次元は相補的に機能する。例えば社会規範に従い自己高揚を図ったがうまくいかなかった場合は、準拠集団規範や個人規範で努力や向上を評価し満足するのである。この3次元の規範は標準的には社会規範の許容範囲の中で準拠集団規範が形成され、その準拠集団規範を内在化する形で個人規範が形成されていくと考えられる。そのため内容的には共通する部分もあるが、相補的な自己評価安定機能のために比較的独立したものとなるだろう。社会規範はその社会の構成員に共有されるものであり、多様性は少ない。準拠集団規範は同じ準拠集団の構成員には共有されるが、異なる集団を準拠集団とする者同士では内容や強調点が異なってくる。個人規範は最も多様性があり、自分が得意とするものや自信があるものを高く評価し、結果的に肯定的な自己評価を維持するように構成されていると考えられる。

この3次元モデルの詳細は別の機会に譲ることとし、本研究では3次元の自己制御尺度を作成し、他のパーソナリティ尺度との関係を検討することを目的とする。個人規範や集団規範それに自己制御と関連したパーソナリティ要因として、ユニークネス欲求、集団主義傾向、内的統制感、セルフ・モニタリング傾向、自己意識傾向との関係を検討する。

ユニークネス欲求 (need for uniqueness; Snyder & Fromkin, 1977) は、自尊感情を高めるようなポジティブな側面における他者との差異に対する欲求である (山岡, 1994)。ユニークネス欲求の高い者は単純に準拠集団規範や社会規範に反発して他者との差異を強調するわけではない。個人の価値観や趣味などの基準に基づいた自己高揚と自己確証を優先的に行うのである。そのために、ユニークネス欲求高群は個人規範制御が強くなると考えられる。また、集団規範や社会規範が個人規範と合致すれば受け入れるし、合致しなければ受け入れないためにこの2つの自己制御とユニークネス欲求に明確な関連は見られないと考えられる。

Yamaguchi (1994) は、集団主義 (collectivism) を個人の目的と集団の目的が対立した場合に集団の目的を優先させる傾向性と主張している。従って集団主義傾向の強い者は準拠集団規範による制御が最優先され、個人規範は後回しになると考えられる。

内的統制感 (internal control) は自分の行動と強化が随伴しており、自分の能力や技能により強化がコントロールできるという信念である (Rotter, 1966)。

内的統制感の高い者は他者の力を頼るのではなく個人の力による自己高揚を重視するといえる。従って、内的統制感の高い者は個人規範に従った自己高揚を優先させると考えられる。一方、自分の力では強化がコントロールできないという信念が外的統制感 (external control) である。本研究で想定している準拠集団規範や社会規範は、個人の行動に対する外的な影響力であると同時に、それを受容した個人に内在化された規範でもある。準拠集団の規範に従い仲間達からの賞賛を得るための自己高揚は自分で強化をコントロールすることであり、外的統制感とは異なるものである。従って内的統制感が弱く外的統制感が強い者は、準拠集団規範や社会規範での制御も弱いと考えられる。

セルフ・モニタリング (self-monitoring; Snyder, 1974) とは、ある社会的状況におかれたときに自分の行動が適切であるかどうかを監視し、適切になるように調整しコントロールする傾向性のことである。このセルフ・モニタリング傾向には個人差があり高セルフ・モニターは相手や状況に合わせて自分の行動を変化させていく。それに対して低セルフ・モニターは相手や状況、自分の行動の適合性に対する監視が弱く、自分の内面に忠実に行動する傾向が強い。これは自分の規範に忠実という意味にもとれるし、自分の感情や衝動をそのまま行動に表す自己制御の弱い人という見方もできる。前者の意味であれば、低セルフ・モニターは個人規範制御が強いと考えられるが、後者の意味であれば低セルフ・モニターは全ての次元での自己制御が弱いと考えられる。

自分に注意を向け、自分を意識しやすい性格特性を自己意識特性 (self-consciousness; Fenigstein, Scheier, & Buss, 1975) と呼ぶ。自己意識特性には私的自己意識 (private self-consciousness) と公的自己意識 (public self-consciousness) の二つのタイプがある。私的自己意識とは自分の感情や態度など、他者からは直接観察することのできない私的・内面的な側面に注意を向けやすい傾向性である。公的自己意識とは自分の外見や行動など他者から観察可能な自己の公的・外面的側面に注意を向けやすい傾向性である。私的自己意識傾向の強い者は個人としてのアイデンティティを重視し、公的自己意識傾向の強い者は社会的アイデンティティを重視する (Cheek & Briggs, 1982)。また、押見 (1992) は多くの自己意識研究を分析し、自己の私的側面に注意が向く状態と公的側面に注意が向く状態は、個人が内在化した異なる基準を顕現化させると考察している。私的自己意識状態では、自分の気持ちや考えに忠実で个性的であれ、自分の能力や感性を高めよという自己実現基準が顕現化する。一方、公的自覚状態では、他者と協調的であれ、他者からプラスに評価される人間になれという社会的受容基準が顕現化するといっているのである。私的側面でも公的側面でも、自分自

身に注意が向くと自分の信じる価値観に従って、自主的に、自覚的に、そして自分で納得できるように自己の行動をコントロールしていこうとするのである。ここから私的自己意識傾向の強い者は個人規範で自己制御する傾向が強く、公的自己意識傾向の強い者は準拠集団の仲間の前では準拠集団規範で、準拠集団の間ではない他者の前では社会規範で自己制御する傾向が強いと考えることができる。

## 方法

自己制御尺度の作成 個人・準拠集団・社会の各次元の規範で自己を制御する傾向性を測定するための尺度を作成した。ある次元の規範で自己を制御するということは、その規範に基づく判断を尊重し優先させることであり、その規範から逸脱しないように自己を確認・制御することであり、その規範に従って自己評価を高揚させることである。この概念的定義に従って、尺度項目を作成した(図1)。

図1の20項目をもとに、個人規範制御尺度、準拠集団規範制御尺度、社会規範制御尺度の3種類の尺度項目を作成した。回答方法はそれぞれ、「1;まったくあてはまらない、2;あまりあてはまらない、3;どちらともいえない、4;ややあてはまる、5;とてもよくあてはまる」の5件法である。個人規範、準拠集団規範、社会規範に関する全体的な教示文に続いて個人規範尺度に回答させた。次に一番自分の仲間だと思う集団を一つ想定させ、その集団を思い浮かべて準拠集団規範制御尺度に回答させた。最後に一番自分が属していると思う社会を一つ想定させ、社会規範制御尺度に回答させた。

使用した他の尺度 ユニークネス尺度(山岡, 1994)、自己意識尺度(押見, 1992)、改訂版集団主義尺度(Yamaguchi, Kuhlman, Sugimori, 1995)、成人用一般的Locus of Control尺度(鎌原・樋口・清水, 1982)、セルフ・モニタリング尺度(岩淵・田中・中里, 1982)。

被調査者 都内の私立大学2校の学生721名(男子359名、女子362名)。

被調査者の年齢は18歳から33歳、平均20.061歳(SD=2.201)であった。

手続 通常の授業時間の一部を利用して全ての質問紙を組み合わせた調査用紙を配布し回答を求めた。調査は2006年1月に実施した。

## 結果と考察

自己制御尺度の内的一貫性を検討するために、 $\alpha$ 係数を算出した。個人規範制御尺度は $\alpha = .7862$ 、準拠集団規範制御尺度は $\alpha = .8737$ 、社会規範制御尺度は $\alpha$

---

各次元の規範の尊重・優先

- 1、私は\_\_\_\_\_のルールに従って生きている。
- 2、私は\_\_\_\_\_の判断を最優先する。
- 7、私は\_\_\_\_\_の価値観や理想や目標がない。(逆転項目；準拠集団規範と社会規範では「～に関心がない」とした。)
- 9、何かを判断するとき、それが\_\_\_\_\_の基準に合うかどうかを最初に考える。
- 11、私は\_\_\_\_\_のルールに反することをしても何とも思わない。(逆転項目；個人規範では「自分」。)
- 16、私はあまり、\_\_\_\_\_の価値観や自分の理想を意識しないで生きている。(逆転項目；個人規範では「自分」。)

各次元の規範に基づいた自己確認・制御

- 3、私が一番うれしいのは、\_\_\_\_\_の基準で満足できる結果を出したときである。
- 5、私は、人からなんとと言われても自分で納得できればそれでよい。  
(準拠集団規範では「自分の所属集団の仲間が納得してくれればそれでよい」、社会規範では「他の社会の人からなんとと言われても、自分の社会集団の人たちが納得してくれればそれでよい」とした。)
- 6、私は\_\_\_\_\_の基準で恥ずかしくないように生きているつもりである。
- 8、私が一番くやすいのは、\_\_\_\_\_の基準で満足できる結果を出せなかったときである。
- 10、私が恐れるのは、\_\_\_\_\_の基準で認められない人間になってしまうことである。
- 17、私は\_\_\_\_\_の目に映る自分のイメージを大切にしている。  
(準拠集団規範では「所属集団の仲間」、社会規範では「社会集団の人達」とした。)
- 19、自分が\_\_\_\_\_の価値観やルールに反していないか、いつも気にしている。
- 20、\_\_\_\_\_の価値観や美意識に反した行動をしてしまうと、自分が嫌になってしまう。

各基準に基づいた自己高揚

- 4、私は\_\_\_\_\_が理想とする人間になろうと努力している。
- 12、私は\_\_\_\_\_の基準で、自分のことを価値ある人間だと思っている。(個人規範で「自分」とした。)
- 13、私は\_\_\_\_\_の基準に従って生きていることに誇りを持っている。(個人規範では「自分独自」とした。)
- 14、私は\_\_\_\_\_の利益を最優先する。
- 15、私はたとえ\_\_\_\_\_のルールに反する行為でも、金のためならやってしまうだろう。  
(逆転項目；個人規範では「自分」とした。)
- 18、私にとって重要なことは、\_\_\_\_\_の基準で自分の価値を高めることである。(個人規範の場合「自分」とした。)

---

文頭の番号は項目番号。

説明のない各項目の空欄には、個人規範では「自分自身」、準拠集団規範では「自分の所属集団」、社会規範では「自分の社会集団」が入る。

---

図1 自己制御尺度項目

表1 使用した尺度間の相関係数

準拠集団	r	.203																	
規範制御	p	.001																	
尺度	n	708																	
社会規	r	.195	.384																
範制御	p	.001	.001																
尺度	n	705	714																
ユニー	r	.508	.047	.041															
クネス	p	.001	ns	ns															
尺度	n	705	708	708															
集団主	r	-.242	.336	.189	-.368														
義尺度	p	.001	.001	.001	.001														
	n	711	715	716	711														
Locus of	r	.266	.072	.108	.157	.004													
Control	p	.001	ns	.005	.001	ns													
尺度	n	709	713	714	709	717													
セルフ・	r	.135	.183	.159	.270	.119	.105												
モニタリ	p	.001	.001	.001	.001	.003	.01												
ング尺度	n	706	710	711	706	713	711												
私的自	r	.364	.128	.115	.340	-.145	.094	.142											
己意識	p	.001	.003	.003	.001	.001	.03	.001											
尺度	n	711	716	716	712	718	716	713											
公的自	r	.132	.302	.293	.121	.261	.007	.258	.389										
己意識	p	.001	.001	.001	.003	.001	ns	.001	.001										
尺度	n	712	716	717	712	719	717	714	719										
社会的	r	-.094	.023	-.010	-.144	.135	-.362	-.310	.152	.301									
不安尺	p	.03	ns	ns	.001	.001	.001	.001	.001	.001									
度	n	713	717	718	713	720	718	715	720	721									
		個人規	準拠集団	社会規	ユニー	集団主	Locus of	セルフ・	私的自	公的自									
		範制御	規範制御	範制御	クネス	義尺度	Control	モニタリ	己意識	己意識									
		尺度	尺度	尺度	尺度	尺度	尺度	ング尺度	尺度	尺度									

=.8867 だった。ここから各尺度は高い内的一貫性を備えているといえる。従って以下の分析では、各尺度 20 項目の評定値の合計点を各次元での規範による自己制御の指標とする。

3つの自己制御尺度と他の尺度の相関係数を表1に示した。3つの自己制御尺度間には有意な正の相関が認められた。基本的に同じ項目を用いているにもかかわらず、それほど高い相関は見られなかった。このことは個人規範、準拠集団規範、社会規範の3つの次元での自己制御が比較的独立して行われているという本

研究の理論的前提と致合する結果である。また、3つの自己制御尺度はどの尺度とも高い相関は認められず、弁別妥当性が高いといえる。

ユニークネス尺度は個人規範制御尺度と中程度の正の相関が認められた。これはユニークネス欲求の高い者は個人規範を最優先させて自己の行動を制御することを示している。また、予測した通り、集団規範制御尺度と社会規範制御尺度とは有意な相関は認められなかった。ここからユニークネス欲求の高い者の行動は、集団や社会に対して反抗し周囲の他者との違いを強調するためのものではないのだといえる。あくまでも個人規範を優先させるために周囲の他者と異なる行動をとる頻度が高くなるのである。

集団主義尺度は個人規範尺度とは有意な負の相関、集団規範尺度と社会規範尺度とは正の相関が認められた。集団の目標と個人の目標が対立した場合に集団の目標達成を優先させるという定義通り、集団主義傾向の高い者は第一に準拠集団規範で自己制御し、二次的に社会規範で自己制御する傾向が強く、個人規範による自己制御は弱いことがわかる。集団主義を規定する要因として文化を想定している研究者も多いが、文化も社会規範の一つである。この集団主義を規定する主要な要因は3次元の規範の顕現性の違いなのだと考えることができる。

Locus of Control 尺度に関しては自己規範尺度、及び社会規範尺度との間に有意な正の相関が認められた。どの規範に従った自己高揚でも自分の力で自己高揚を求めることは内的統制である。しかし準拠集団規範は現実の外的圧力を想起させやすいために、内的統制感の強い者は準拠集団規範の影響を過小評価し、個人規範に従い自己高揚する自分を認知的に強調すると考えることができる。そのため、準拠集団規範との間に有意な相関が認められなかったのだと解釈できる。

セルフ・モニタリング尺度は3つの自己制御尺度全てと有意だが弱い正の相関が認められた。セルフ・モニタリングは状況に応じて自己表出をコントロールする傾向性である。それに対して本研究で作成した3つの自己制御尺度は、各規範に基づく判断を尊重し優先させること、その規範から逸脱しないように自己を確認・制御すること、及びその規範に従っての自己評価高揚である。セルフ・モニタリングも状況ごとの規範を意識し自己をコントロールする傾向であるが、内面化された自己制御規範ではなく、状況の変化に即座に対応するための一時的な行動調節機能と考えることができる。

自己意識尺度の中の私的自己意識尺度は、3つの自己制御尺度全てと有意な正の相関が認められた。本研究で想定した自己制御は、ある次元の規範を内在化しそれに従って自己制御することである。そのためには自己の内面に意識を向ける必要がある。特に個人規範の場合は自分の内面を意識すること無しにその規範

を顕現化させ、自己制御することは不可能である。それに対して、準拠集団規範や社会規範の場合は他者の行動を参照して自己制御することが可能であるために、個人規範尺度と比較すると私的自己意識尺度との正の相関が弱いのだと考えられる。公的自己意識尺度も同様に、3つの自己制御尺度全てと有意な正の相関が認められた。しかしこちらは私的自己意識とは逆に、個人規範尺度との相関よりも準拠集団規範尺度と社会規範尺度との相関の方が強くなっている。公的自己意識は他者から観察される自己の側面に意識が向く傾向性であるから、準拠集団や社会の他者の目に規範を逸脱したおかしい人と映らないように自己の行動を制御するためだと解釈できる。また、他者が存在する場面で動揺してしまう社会的不安尺度は個人規範尺度と、有意であるがかなり弱い負の相関が認められた。個人規範を優先させて自己を制御することは場合によってはその場にいる他者からの反発を受けることもある。社会的不安と個人規範尺度の弱い負の相関は、社会的不安の強い者はその場の他者からの反発を恐れて個人規範に従って行動できなくなるためだと解釈できる。

従来、個人的アイデンティティと社会的アイデンティティ、個人主義と集団主義、私的自己意識と公的自己意識などの文脈で個人の価値観を反映した行動基準と社会や集団の価値観を反映した行動基準の二つがあることが繰り返し論じられてきた。多くの研究で個人と集団は対立するもの、特に個人基準は他者のことを全く考慮しないものと捉えられてきた。例えば、Hui & Triandis (1985) の集団主義尺度では集団主義とは、他人への関心を持つこと、自分の意志決定の時に他者のことを考慮すること、他者ともものを分かち合うことだと定義されている。つまり彼らが考えている個人主義とは、他者への関心を持たず、他者を考慮せず、全ての資源を独占する自己中心的な利己主義者ということになる。内的統制と外的統制という概念は、まさに自己と外的環境は対立するという信念を表している。また、自覚状態理論の提唱者である Wicklund (1975ab) は、自己は環境の力と対立、拮抗する力を持った行動の規定要因と考えており、自己に注意が向くと人は自立的で自己中心的になり、社会的規範に無関心になり他者のことを気にかけず、他者からよく思われたいという気持ちも起こらないということになる (押見, 1992)。

しかし、私的自己意識の強い人が他者の評価を気にして自分が望む印象を他者に与えようとしたり (Schlenker & Weigold, 1990)、状況によっては内集団ひいきや内集団の誇らしさなど社会的アイデンティティと関連した反応を示す (Abrams & Brown, 1989) などの報告もある。また本研究ではユニークネス尺度とセルフモニタリング尺度、及び公的自己意識尺度の間に有意な正の相関が認



められており、個人規範による自己制御が強いユニークネス欲求高群の行動は他者を含めた状況を無視するのではなく、逆に他者の目に映る自己像を意識し状況に合わせて自己のユニークさを印象づけようという自己呈示的側面が含まれているといえる。個人規範は他者や外的環境と独立したもので対立したものでないのである。社会規範や準拠集団規範にしても個人の行動を規定する外的な力であると同時に、個人が内在化した自律的な力でもあるのである。

通常はあまり3次元の自己制御規範を意識せず、その場その場の状況的規範により自己制御している。この状況的自己制御機能がセルフ・モニタリングであると考えることができる。セルフ・モニタリングは、3次元の自己制御規範と変化する外的環境のインターフェイスなのである。自分が置かれている外的環境のセンサーであり、その状況的規範を取り込む入力装置であり、自己制御規範で決定された行動を外的環境に適合するように調整する出力調整装置としてセルフ・モニタリングを位置づけることができる。単なる社会的依存性ではなく、インターフェイスとして積極的な機能を担っているのである。集団活動などによりその場の状況的規範情報の入力が過剰になりすぎると自己意識は低下し、自己制御規範は起動せず、没個性化状態になるのである。

外的な強化刺激、外集団の存在、活動の性質など自己のカテゴリー化や自己フォーカスを促進する刺激、またパーソナリティ特性によって規範の顕現性が異なってくる。ユニークネス欲求は個人規範を顕現化させ易いパーソナリティ要因である。逆に集団主義は準拠集団規範を顕現化させ個人規範を後退させるパーソナリティ要因である。ちなみに、集団主義尺度は公的自己意識とは正の相関、私的自己意識とは負の相関が認められていることから、この解釈は妥当性が高いといえる。

自己カテゴリー化理論 (Self-Categorization Theory; Turner, 1987) では、自分の所属集団と他の集団との間の差異が、所属集団の他のメンバーと自分との間の差異よりも大きいと主観的に認知できるときは集団レベルで自己を概念化し、逆の場合は個人レベルで自己を概念化するというように、上位カテゴリー間の差異の認知と下位カテゴリー間の差異の認知の比率 (メタ・コントラスト比: meta-contrast ratio) により自己の概念化レベルが規定されると考えている。日常生活でも様々な集団やカテゴリーに同時に所属しており、我々は様々なレベルでの自分を概念化し意志決定し行動している。しかしそのときに、上位カテゴリー間の差異と下位カテゴリー間の差異を認知しているとは考えられない。また Turner は、集団レベルで自己を概念化しているときは脱個人化が起こるというように、あるレベルで自己を概念化しているときには他のレベルでの自己概念は

抑制されると考えているが、そうであれば個人規範と所属集団での要求の葛藤などは起こらないだろう。葛藤が起こるのは内面化されたいいくつかのレベルの規範に従った判断や外的な要求が対立するからである。2つのレベルの類似度知覚という複雑で日常的に経験されないプロセスを仮定するよりも、個人・準拠集団・社会の3次元の規範の顕現性が異なることで単独の個人として行動したり、集団や社会の一員として行動したりすると考えた方が現実の行動を理解しやすいだろう。

個人・準拠集団規範・社会の3次元での自己制御規範、それに自己と外界とのインターフェイスとしてのセルフ・モニタリングという3次元自己制御モデルを考えることで、ユニークネス、集団主義、セルフ・モニタリング、自己意識研究など従来個別に研究されてきたいくつかの現象を一つのモデルで考えることもできるようになるのではないだろうか。それは個人内現象から集団間現象までを視野に納めたモデルとなることであろう。この3次元自己制御モデルの精緻化と検討を今後の研究課題としていきたい。

#### 引用文献

- Abrams, D. & Brown, R. (1989). Self-consciousness and social identity: Self-regulation as a group member. *Social Psychology Quarterly*, *52*, 311-318.
- Cheek, J. M. & Briggs, S. R. (1982). Self-consciousness and aspects of identity. *Journal of Research in Personality*, *41*, 330-339.
- Fenigstein, A., Scheier, M. F. & Buss, A. H. (1975). Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, *43*, 522-527.
- Hui, C. H. & Triandis, H. C. (1985). Measurement in cross-cultural psychology: A review and comparison of strategies. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, *16*, 131-152.
- 岩淵千明・田中國夫・中里浩明 (1982). セルフ・モニタリング尺度に関する研究 心理学研究, *53*, 54-57.
- 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 (1982). Locus of Control 尺度の作成と、信頼性、妥当性の検討 教育心理学研究, *30*, 302-307.
- 押見輝男 (1992). 自分を見つめる自分 自己フォーカスの社会心理学 サイエンス社
- Rotter, J. B. (1966). Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement. *Psychological Monograph*, *80*, 1-28.
- Schlenker, B. R. & Weigold, M. F. (1990). Self-consciousness and self-presentation: Being autonomous versus appearing autonomous. *Journal of Personality and Social Psychology*, *59*, 820-828.
- Snyder, M. (1974). Self-monitoring of expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, *30*, 526-538.
- Snyder, C. R., & Fromkin, H. L. (1977). The development and validation of a scale mea-

- asuring need for uniqueness. *Journal of Abnormal Psychology*, **86**, 518-527.
- Turner, J. C. (1987). *Rediscovering the social group*. New York: Basil Blackwell Ltd.
- Wicklund, R. A. (1975a). Object self-awareness. In L. Berkowitz (Eds.), *Advances of experimental social psychology*. Vol. 8. New York: Academic press.
- Wicklund, R. A. (1975b). Discrepancy reduction or attempted distraction? A reply to Liebling, Seiler and Shaver. *Journal of Experimental Social Psychology*, **11**, 78-81.
- Yamaguchi, S. (1994). Collectivism among the Japanese: A perspective from the self. In U. Kim, H. C. Triandis, C. Kagitcibasi, S. C. Choi & G. Yoon (Eds.) *Individualism and collectivism: Theory, method, and applications*. 175-210. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Yamaguchi, S., Kuhlman, D. M & Sugimori, S. (1995). Personality correlations of allocentric tendencies in individualistic and collectivistic cultures. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, **26**, 658-672.
- 山岡重行 (1992). 集団内現象としてのユニークネス 立教大学心理学科研究年報, **34**, 43-55
- 山岡重行 (1994). ユニークネス尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 社会心理学研究, **9**, 181-194.